資料館だより

企画・編集　国立ハンセン病資料館
発　　行　公益財団法人
日本科学技術振興財団

〒189-0002 東京都東村山市青葉町4-1-13
電話　042-396-2909
FAX　042-396-2981
URL　http://www.hansen-dis.jp

新たな年を迎えて
―ハンセン病を巡る市民の関心と責任―

国立ハンセン病資料館　館長　成田　稔

国立ハンセン病資料館二〇一一年度秋季企画展『たたかいつづけたから、今がある―全療協60年のあゆみ―』の付帯事業、連続講演会において、講演者の一人である神美知宏全療協会長が、当資料館の目的ともかかわる重大な二つの論点を話の中に盛り込んでいました。

その一つは「らい予防法違憲国家賠償請求訴訟（以下「らい予防法国賠訴訟」）」の原告側勝訴をうけて、厚生労働省や首相官邸に控訴断念を要請してデモを行った際の、一般市民からの応援を望外の喜びとする一方、これまでの関心は決して高くはなかったと振り返る発言でした。

あとの一つは、ハンセン病療養所の将来構想に言及しながら、その内容如何にかかわらず、われわれ入所者の現実的な願いは、入所前の生活の場に何の気兼ねもなく戻りたい、ただその一言に尽きるものの、入所者の平均年齢が八〇歳を超えた今に至ってなお、ほとんどのものがその願いを叶えられていないという実状でした。

これらの二点は、私自身もかねがね思い煩ってきましたし、断片的ではありますが、『多磨』の誌上を借りて若干の意見も述べてきました。詳しくは稿を改めますが、根底にある問題は「世間」の存在ではないでしょうか。ここでは「世間」という概念を、現に自分とかかわりのある人びと、ないしはこれからかかわりを持つかもしれない人びとも含めた、いわばふだんの居場所（隣近所のようなもの、現在の自分らの職場なども同じ）といった、限られた狭い生活区域を指すものとして用います。

「世間」に対して「社会」とは、広い意味での共同生活を営む人びとの集団ともいえます。例えば、「らい予防法国賠訴訟」が一つの社会問題として大きく取り上げられたのは、誰しもが持てたはずの人生を、誤った認識のもとに国家的権力をもって強制的に奪われた人（ハンセン病患者）の思いに、同じ社会人としていたく共感し、国の謝罪はもちろん賠償も当然と受け取られていたからです。

神会長が嘆いたのは、社会にあまねく伝えられたはずの、この衝撃的な事態をもってすら、入所者のうちの僅かな人しか故郷に戻れなかったことでした。ハンセン病は「普通の病気」であり、それを病む、あるいは病んだ人も「普通の人」でしかないことを、国の謝罪と賠償が明らかにしていたにもかかわらず、です。

「世間」には、ハンセン病患者・回復者はおろか死者までを含めて、それらと「家」とのつながりを知ると、あそこは悪い血筋だ、血統だなどと口さがない噂を、自らの愚かしさや物知らずをよそに触れ回る人もいます。これでは、入所者は故郷に戻りたくとも戻れないでしょう。神会長が、「市民にも責任がある」と言った真意は、このあたりにもあるかと思われます。

話を戻しますが、神会長が述べた「ハンセン病についての社会の関心の低さ」に関連して、私もハンセン病への一般の無関心層は九〇％にものぼるのではないか、と『多磨』に書きました。この一文は「資料館」の啓発活動への奮起を、自ら促したつもりでしたが、神会長の発言を受けて、改めて一歩踏み出そうと、思いを新たにしております。

どうか皆様方にも、昨年同様今年もまた格別のご支援をいただきたく、何卒よろしくお願い申し上げます。

二〇一二年　元旦

今年の干支は辰（たつ）である。辰は十二支の第五、辰の刻は午前八時ごろで、方角では東南東を指す。龍は訓読みではたつで水中に住み雲をよんで天にのぼるといわれ、十二支の中では唯一想像上の動物である。龍神、龍虎、龍宮、龍王、龍のおとしご、関連の言葉は多いが龍頭蛇尾になった。

刺繍「海に飛ぶ鶴」大島青松園　米田和子

全療協60周年記念展閉幕

100枚の写真パネルと映像で説明

昨年10月1日から12月27日まで、二〇一一年度秋季企画展「たたかいつづけたから、今がある　―全療協60年のあゆみ―」を開催した。結成から60年を迎えた全国ハンセン病療養所入所者協議会（全療協）の足跡を、主に写真と映像とで追った。今回の展覧会は、全療協から全面的なご協力をいただくことで実現した。

企画展示室は入口から順に、実物資料、写真パネル、映像の3つのエリアで構成した。写真パネルを掛けるために仮設ボードを立てて長い回廊をつくり、その前後に小さな広間を設けた。最初の広間は実物資料を展示するのにあて、最後の広間は映像を視聴するための小部屋とした。

実物資料としては、今年5月に松丘保養園で開催された第72回定期支部長会議の会場を模したコーナーを設け、スローガンや全療協旗を掲げた。また向かいに展示ケースを置いて長島愛生園自治会からお借りした瀬戸内三園協議会の文書や第一回支部長会議議題を入れ、駿河療養所入所者がらい予防法闘争を闘い抜くために書いた寄せ書きを壁に掛けた。今回の展覧会のタイプがほぼ写真展だったため、実物資料の展示点数は少なかったが、最初に見学者のイメージを喚起する導入としての役割を持たせることができた。

写真パネルは、11のテーマに沿って展示した。順に、全癩患協誕生、らい予防法闘争、らい予防法闘争以後、看護切替と六・五闘争、生活費の確保、医療の充実、沖縄の「本土並み」、施設整備、らい予防法改正・廃止、国家賠償請求訴訟、熊本地裁判決以後の各テーマを、それぞれ1つのコーナーとして設定した。全療協運動の前史である栗生楽泉園の人権闘争から、一九五一年の全癩患協発会式を経て、現在の課題である将来構想まで、合計一〇〇点を壁に掛けた。過去に「全療(患)協ニュース」に掲載されたものや、今回初めて公開したものなど、それぞれ当時の熱を感じさせる貴重な写真をご覧いただいた。

映像コーナーは、周囲を仮設ボードで囲って閉鎖的な小部屋をつくった。それまでとは別の空間の中で、全療協運動の歴史の概要について、入所者のお話でまとめた映像をご覧いただいた。写真パネルで一度、映像でもう一度と、異なるアプローチを設けることで、お互いに補完的な役割を担い合って、全体として全療協運動の歴史的経緯がより伝わりやすくなるのではないかと考えた。映像は各園にうかがい、テーマごとに13人の方のお話を撮影させていただいて制作した。全体で2時間6分という長大なものになったため、開始時間を決めて1日に3回上映した。

今回の企画展を開催することにした理由は、全療協の結成60周年を記念することと、とかく目を向けられることの少ない全療協運動と戦後のハンセン病政策の推移についても、その概要と意義を少しでも一般の方々に伝えることにあった。しかし会期中を通して、入所者の方々がいつもより関心を示された反面、一般の方々の関心はあまり惹かなかったようだ。展示手法も、いくつかある展示のタイプの中でも比較的分かりやすい写真展という形であったにもかかわらず、そもそも企画展を見るために来館される利用者が少なかった。これが、すでに流布しているハンセン病患者・回復者のイメージと合わないがために戦後の歴史的事実を知りたがらないとか、運動と名の付くもの全般を漠然と敬遠したがる風潮に起因しているのではないことを願いたい。

なお今回の企画展の一部は、全療協からの要望に応えて、4月以降巡回展として全国各所を回る予定になった。各自治体から申し込みがあれば、資料館以外の会場で写真パネル一〇〇枚を再び展示する。詳細はホームページ、または学芸課まで。

付帯事業で連続講演会開催

秋季企画展の付帯事業として、11月12日から12月3日までの毎週土曜日に、映像ホールで連続講演会を開催した。「わたしの運動の記憶」と題して、週替わりで4人の方々にお話しいただいた。

11月12日の佐川修多磨全生園自治会長を皮切りに、19日平沢保治前多磨全生園自治会長、26日神美知宏全療協会長、12月3日鈴木禎一元全患協事務局長の順だった。今回の企画展で展示した写真一〇〇点の中からお好きなものを選んでいただき、スライドで映しながら講演していただいた。

いずれも長年全療協に関わって来られたり、現在も中心となって活動されている方々で、それぞれの体験に基づく全療協運動についてのお話は、本で読むのとはまた違う臨場感を伴ったものだった。内容としても、初めて知ることも多く、また今後の展望への言及も含まれていて、たいへん興味深いものだった。毎週のように雨に祟られたこともあって来場者は少なかったが、講演後の質疑では会場から、話の趣旨に合った適切な質問や意見が比較的多く出された。

今回の4人の方のお話は、講演録としてまとめる予定である。今後も企画展の度に付帯事業は開催していくことになるだろうが、意味があり、かつ回復者の方々にあまり負担とならない形を考えていきたい。

学芸員による各園での資料調査

【駿河療養所】

昨年1月から3月まで実施した駿河療養所の実物資料調査について、写真と基本情報を記載した報告書を作成した（二分冊、総ページ数五四二）。駿河療養所の実物資料は旧木工所内の大工道具や日本棋院駿河支部（囲碁会）の資料、駿河会（全患協駿河支部）関係資料を中心に五〇〇点以上が収集され、駿河療養所ふれあいセンターに保管されている。

【邑久光明園】

6月21日から27日に行われた実物資料調査に引き続き、11月7日から11日にかけて邑久光明園で追加調査を行った。

学芸員の西浦直子・田代学が滞在し、前回調査を終えることが出来なかった「かえで会館」（旧看護学校）収蔵の実物資料と、資料展示室に新たに展示された点字印刷機と「街角の赤電話」（音声資料）についての実測・撮影等を行った。かえで会館には、看板・標柱、点字器、食器、義足・義手、大工道具、衣類、トロフィー、囲碁将棋関係資料、ゲートボール関係資料、印鑑、神社の御簾、石臼、樽、桶、本棚、机、洗濯機など、入園者の暮らしを跡づける資料群が文字通り山積みの状態となっている。

邑久光明園では前回と合わせて、合計八百九十八点の資料の調査を終えた。引き続き調査報告書の発行に取りかかる。

調査を終えた邑久光明園の資料群

沖縄愛楽園での巡回展

【沖縄愛楽園】

10月24日から10月27日まで治療棟待合ホールにて巡回展を実施し、学芸員の黒尾和久・稲葉上道が滞在し、入所者へのパンフレット配布と来場者への対応を行った。この間、入所者からの生活用具や作業道具、写真類など新たな資料提供があったほか、入所者自治会がこれまでに収集・保管してきた資料についてご教示を得た。巡回展の実績を踏まえて、続いて12月12日から16日にかけて、入所者自治会の協力のもとで、新出・既存資料の実測・撮影・リスト作成を行っている（詳細については次号に掲載予定）。

小宮山厚労大臣が来館
展示見学後記者会見

9月2日に成立した野田佳彦内閣において厚生労働大臣に就任した小宮山洋子大臣が、第一七九回臨時国会の開期を翌日に控えた10月19日（水）に来館した。

午後2時45分に全生園に公用車で到着した大臣一行は、一般介護棟支援室において全療協・入所者自治会幹部との懇談を行い、その後、松谷園長の案内で、第3西センター、工事中の保育所予定地、宗教地区、望郷の丘などの園内施設をマイクロバスにて見学、次いで納骨堂での献花を行い、滞在時間はわずか30分というあわただしさではあったが、成田稔館長が出迎え、平澤運営委員、黒尾学芸課長の案内で資料館を見学した。

まず1階展示室エントランスにおいて、黒尾課長が、本資料館の設立経緯と理念、収蔵資料の特長についての説明を行い、続いて2階の常設展示室で平澤委員が加わり、展示コーナーの要所で過去の療養所生活について、氏の個人的体験に基づくエピソードを織り交ぜながらの解説をした。

見学を終えた小宮山大臣は、資料館ロビーにて記者の取材に応じ、施設見学を終えた感想として、「まわりの施設・史跡とともに、ハンセン病資料館についても、ずっと残していくべきだと考えています」と発言した。それが印象深く、また心強く思えた。ハンセン病問題の解決のために、大臣には、是非強力なリーダーシップの発揮をお願いしたい。

小宮山大臣の記者会見

東村山消防署より最優秀賞を受賞

当館では万一の災害発生時に備えて自衛消防隊を組織し自衛消防活動を行っていますが、東村山消防署が実施した平成23年度自衛消防訓練効果確認に参加し審査を受けた結果、最優秀賞を受賞し、11月9日に表彰されました（Dブロック「物品販売店舗・市役所等」）。

また、併せて、当館自衛消防隊は火災予防業務協力者功労者表彰で消防署長表彰を受けました。昨年一昨年とも優秀賞を受賞しましたが、職員が一丸となって訓練を重ねた結果、念願の最優秀賞を受賞できました。来館者の皆様になお一層の安心感をもってご来館いただけるものと思います。

表彰状

最優秀賞
国立ハンセン病資料館
自衛消防隊 殿

貴隊は平成二十三年度自衛消防訓練効果確認において日頃の訓練成果を遺憾なく発揮し頭書の成績を収められましたよってこれを表彰します

平成二十三年十一月九日
東京消防庁
東村山消防署長 菊池 勲

最優秀賞を受ける

第38回全生園まつり開催
盛り沢山なイベントで賑わう

11月1日から3日まで、「広げよう助け合いの心、残そう全生園の森」をテーマに第38回全生園まつりが、開催された。

コミュニティセンターでは入所者による作品の展示が行われた。手芸、陶芸、盆栽、絵画、書道、写真、華道、文芸作品である。

1日の開会式の後には保育園の子ども達がさっそく見学に訪れ作品に見入っていた。今年は菊花や盆栽の賞状、百歳を迎える入所者の長寿のお祝いなど、例年にはない展示が見られた。今年8月に逝去された石神耕太郎氏による盆栽「唐楓」も展示されていた。石神氏は当館の映像にも協力していただいた方で、盆栽を生きがいにしておられた。元気だった石神氏を思い出させるように、遺作は鮮やかな色を見せていた。

3日は中央通りに模擬店が並び演芸が発表されて多くの人が訪れ賑わいをみせた。売店十字路では花さき保育園の園児による「ソーラン節」、看護学生によるフラダンス・創作ダンス、モグネットによる韓国農楽の発表が行われ、成田庭苑では職員バンド、藤宗太鼓の発表が行われた。福祉会館では看護学生による第44回楓祭りが行われた。今年も売店前の机は満席で、模擬店には行列ができ、入所者や来園者が楽しい一日を過ごした。

展示を見る保育園児

全生園で第19回秋の緑の祭典

全生園まつりが行われている11月3日、望郷の丘東側の広場で「秋の緑の祭典」が開催された。東村山市立第四中学校吹奏楽部の演奏で幕を開け、続いて式典となった。東村山市緑を守る市民協議会佐々木幹事の司会で渡邉静夫会長、相談役・細渕一男、自治会長・佐川修が挨拶し、その後渡邉会長より剪定料として五万円の贈呈があった。続いて来賓挨拶があり渡部東村山市長、熊木市議会議員から「人権の森」を通じての全生園との関わり、これからの抱負が述べられた。その後、東萩山小学校児童代表による「きれいな環境に」という研究発表が行われた。会場には東村山市関係者、市議会議員、都議会議員、前衆議院議員、厚労省、NPO法人東村山活き生きまちづくり、学校、PTA、入所者など200人近くの人が集まった。

会場と望郷の丘の間にある神社通りには70メートルのミニSLが設置され、親子が楽しむ姿が見られた。来場者には花の種が配布された。

草津のかあさま・コンウォール・リー展

去る11月16日～20日までの5日間、当館ギャラリーにおいて、聖バルナバミッションとリー女史記念事業推進委員会の主催で右記展覧会が開催された。

本展では、ハンセン病患者の救済に尽力したイギリス人宣教師コンウォール・リーの功績を伝えるとともに、リーの身近な品の展示から、日本での生活の様子を示す内容となっていた。来館者たちは、一九一六年、群馬県草津に聖バルナバ医院を始め、ホームや教会、小学校、保育所を開設し、患者とその家族を救済したリーの生涯に思いを馳せながら熱心に観覧していた。

コンウォール・リー展

東京法務局人権啓発展

去る11月3日、当館ギャラリーでは東京法務局人権擁護部主催による人権啓発展が開催された。訪れた来館者はハンセン病患者・回復者に対する正しい理解を深めるためのパネル展示を熱心に観覧していた。同会場には東村山市中央図書館の蔵書展示コーナーも設けられ、ハンセン病や人権の大切さについて理解を深める場となった。

また研修室では、子ども向けのビデオ上映会やぬりえなどができる特別ブースも設けられ、全生園祭に訪れた子供たちで展覧会場も賑わった。

来館者の声

大学生　男　21歳　千葉県

大学のゼミの時間や学校の授業で、ハンセン病について学んできましたが、やはり直接目にするのとは印象が異なりました。

しかし展示室3で自分より大きな壺を作っていたりと、多くの作品を見て「生きることが本当に楽しいのだなあ」と思いました。

VTRの中でも「楽しみがなければ生きていけない」と言っていましたが、本当にそうだと思いました。昔の本を見ると「生きることが嫌だ」という文章があったのでとても驚きました。来館して本当によかったです。

地婦連　女　67歳　北茨城市

何回か来ましたが、いつも心がいやされます。暖かくむかえて下さる方々に敬意を表します。有難うございました。

大学生　男　21歳　大和市

隅々まで見るのにはもっと時間が必要だと思いました。特に証言者の声のコーナーは何日か通わないと難しそうでした。

一番目に引いたのは、ろう人形の細かい生活風景の再元モデルでしたが、その他の模型も非常にきれいに作られていてよかったです。

特に無料配布の資料、棚にぶ厚い本が置いてあって驚いた。また来たいと思います。